

△ 第二二回大会に参加して

阪井達朗

かつて発会式が開かれて以来、村研の「ふるさと」と言われてきた東北地方——宮城県白石市外遠刈田温泉——での今年の大会である。新参会員であるから勿論伝説化した「農民の家」も「鳴子温泉」も経験があるわけではない。ただ毎年のように先輩会員によつてくり返される、発足期の村研のユニークな雰囲気の思い出話いや、わずかに自分も体験している天童大会での記憶が、この地方と村研と

の結びつきを特別なものと意識させるのである。ましてや先輩諸会員にとって、東北地方での大会には格別の思い出と感慨とがつきまとっていたことであろう。大勢の会員が前夜から集まつて翌朝から研究発表にそなえるのも、例年のこととは言いながら、事務当番校と開催校の皆様のご苦心になる会場設営と大会運営の妙にくわえて、こうした背景も今年の大会の一きわの盛り上りにあずかって力があつたかもしれない。

○

大会は第一日（十月十二日）に五つの自由報告と二つの課題報告、翌日は一つの課題報告、質疑応答、共同討論及び開催校の御配慮のエキスカーションにあてられた。

本年は共通課題に「日本資本主義と家」をかけての第一年目である。このところ村研は、ムラの内部構造、ムラの解体、都市とムラの関連と考えを進めてきている。こうした中から、ムラを構成する単位である家がどのような要因で成立しているか、また家とムラとはどのように関係し合っているか、そうしてこの両者は、日本社会の全体的変化の中でどのように変っていくか、と云う問題が浮び上つてくる。こうした諸問題を一言で表現したのが、「日本資本主義と家」であった。

報告でとりあげられた諸事例は、時代的に見ると、日本資本主義の前段階とも言うべき享保期、形成確立期である明治期、及び現段階と、ほぼ三時期に大分することができる。また地域的に見ると、

北海道（釧路支庁標茶町）、東北地方（秋田県大曲及び横手）、関

東地方（栃木県宇都宮、埼玉県吉見、茨城県瓜連、千葉県東金）、中部地方（山梨県塚川、長野県諏訪、石川県能登、岐阜県飛騨白川）、九州地方（鹿児島県大隈）と広く全国にわたっており、それぞれ熱のこもった発表がなされた。

報告でとりあげられた問題点は次の通りである。日本資本主義の前段階については、甲州における諸代下人の解放、地主制の形成と村落構造の問題。形成確立期については、地租改正に際して地券の名義がどのように決定されたかを通じて考えられた私的土地位所有権法認の内実の問題。同じく戸籍の除籍簿の徹底的な検討と労働力移動——農閑期における出稼ぎ就業と云う新しい分析視界の導入とをふまえての飛騨白川村の「大家族制度」の意味とその解体に関する考察。日本資本主義の現段階については、農地移動と農業就業構造を低生産地帯、都市近郊兼業地帯、東北型農村の三地域に分類しての比較。農民の賃労働兼業化とともに農民家族の労働力構成の変化——農業危機の一層の進化としての土地持ち労働者化の考察。昭和三十年代後半以降、主として東北地方から都市に集まる出稼ぎ労働の機能と影響の問題。北海道の酪農地帯で農政によって創られた専業上層農家の經營にみられる矛盾の分析。さらに能登半島の社会的性格の異なる三つのムラにおける、家と村落構造の比較の試み。いずれも村落社会における家のもつ複雑多岐の問題点を、それぞれの時代的背景のもとに、さまざまの角度から掘り下げたものである。

大会第二日の午後が共同討議にあたられるのも例年の通りである。

この一年間に大会準備のために持たれた三回の研究会での論議を基

礎にしながら、大会での報告をめぐって、いくつかの論点にしほつた活発な議論が展開した。その詳細はいすれ年報に掲載されると思われるから、ここでは出された論点に簡単にふれるにとどめておく。討論はまず現下の農家経済をめぐる問題点から出発し、「古典的な分解とはちがって非常に複雑な要因をもちながら従来とはかなり変わった形態に進んでいく」（研究通信九二号、安孫子会員の報告）と言われる農民家族の存在形態を、生産と扶養の共同組織の統一としての農家がどのように変化しているかに焦点をあてて、その具体的相が、土地所有規模、家族形態、兼業の在り方等から検討された。そこから従来の村落社会にみられなかった、都市の勤労者の家族に近い性格をもつ農家が生れてきており、それにともなってムラの構造も変化していることが指摘された。

次にこのような全体的経済状況の下にある農家の社会的性質が、午前中に報告された能登半島にみられる「ツラ制度」（屋敷・家名・耕地の複合体系）。これをもつことが一戸たる条件となる）に関連して論じられた。これに関して、他地方における類似の制度についての幾つかの事例が発言されて、一般にムラのなかで一戸の家が承認されるために必要な条件は何かという方向に展開した。

同時にこれは、第三回研究会の討論で出された、家とは何かを改めて問う（研究通信九三号）と云う問題意識につながるものであり、前出の二つの論点を総合した形で今日の、労働力のみでなく土地でもが商品化する状況の下で、ムラと農家がどのように変貌していくかについて、農民の土地觀の変化、大規模農業機械をもつ請負耕

作者の出現、家のもつ消費面と生産面の乖離、直系家族の変質一一

世代家族化、自作農の家族協業の崩壊等の現象とその意味が論じられた。

共同討議はこれらの論点をめぐって、約二時間にわたって行なわれた。司会者の御努力によって、論議が進むにつれて、従来とかく歯車の合いかねる感覚のないではなかつた経済学と社会学との論点が近づきつあるとの感じをうけたのであるが、時間の都合もあつて、残念ながら終了することになった。

勿論この二時間の討議すべての論点が出つくしたわけではない。すでに共同討議の席上で、日本資本主義の労働力市場形成との関連で家をみることの必要性、農業生産に直接は結びつかない家の持つ問題をとりあげる必要性、さらに、かつての家がはたしていた社会的機能と云う側面からのアプローチの必要性等が指摘されている。さらに、司会者の総括においても今後に残された問題点として、

民法改正や農地改革等の戦前戦後の家の変化を考える上で規準となるべきものを正面に出すこと、また生産の単位としての家と家産としての家とが、生産力の各発展段階でどのように関わり合つてゐるかを問題にすること、さらに研究対象の年代についても、中間項としてファシズム期における家の問題をとりあげることの必要性などをあげられたのである。

これらの点を問題として後に残しながらも、本大会は力のこもつた諸報告と、普段よりも歯車の噛み合いの良い討論とで、問題を解決したとは言えぬまでも、問題点の所在を明確にする上で大きな成

果をあげたと云う印象を与えたのであった。



大会の全日程が終了した後、なお事務局にお願いして一泊させていただいた。合宿は先輩会員八名であった。学会終了後のホフとした気持の中で夕食後にもたれた団欒の一時は、これまで昼間の報告に劣らぬ滋味深いものであった。いまその内のいくつかの話題を御紹介すると、例えば中野・原会員が終戦直後の隱岐島の調査でされた興味深い体験とそれを通じて考えられたムラの性格。柿崎会員が昼間の報告でふれられなかつた白川村調査での苦心談。黒崎会員の留壽都での経験。さらには、すぐれた調査報告には必ず一種の「土のにおい」がするものであると云う、まるで職人の名人芸のような判断など。いずれも研究報告の場では出てきにくい話題であり、かつそのまま聞き流してしまうにはもったいない価値の高い雑談であった。

大会での報告からうけた種々の啓発に加えて、開催校の御配慮のエキスカーションで見た見事な紅葉に映える藏王山の雄大とこうした調査の名人達の「こぼれ話」を聞く機会を得たことが、私にとっては今年の村研を忘れないものにするであろう。改めて事務局及び大会運営担当の中央大学・東北大学の会員の皆様にお礼を申し上げます。